

八田 七郎右エ門



武生市矢船町で昭和32年から39年まで営巣産卵を続けながら仲間を殖やすことができなかった。小浜市羽賀地区では4回もヒナをみたのにヘイ死や成長の確認ができないままに最後の親鳥も農薬汚染から守るため豊岡市のフライングゲージに送られて県鳥に指定されたコウノトリも昭和40年をもって本県から姿を消してしまった。一方昭和30年頃には十数羽いた豊岡市のコウノトリも有機

水銀の汚染で次々とヘイ死し、ゲージ内の1羽と野外の1羽のみとなり日本産コウノトリの絶滅は時間の問題となり、人々の温かい保護の手も50年の手おくれとなってしまった。再び得ることのできない文化財、人間の横暴と無力を猛省し、1人でも多くの自然愛護者保護活動家を願い続けていた矢先、昭和45年12月4日武生市上黒川町にコウノトリの飛来をみた。この1羽のコウノトリに対する人々の好意観察について、話は前後するが、項目に分けて述べてみたい。

1. 初認 昭45 12. 4 曇

12月4日午前10時頃 武生市白山地区にコウノトリと思われる大きな鳥がいるから見に来てくれとの電話を頂戴した。体は純白に近く、翼の先が黒色で飛んでいる時の頸は伸ばしているとの返事に「多分そうでしょう。すぐ伺います。」とお答えをし、報道の可否をためらったが、前回のこともあるので福井新聞社の方と同道、電話をくださった武生第五中学校へ急いだ。鳥は今小高い山を越えて黒川町の方だということだったが、小川先生のスケッチによる説明によると間違いなさそうである。早速黒川町へ向かう。山のはずれを出たとたん県道から10mと離れない湿田に間違いなくコウノトリが1羽小雨の中にたたずんでいた。確認の撮影をしているところへ武生市社会教育課の土田課長さんらが探し求めて戻ってこられるところであった。特別天然記念物コウノトリであることをお互いに確認し合い、保護について地元の方をお願いをし、第五中学校では校長先生はじめ先生方総出で、保護呼びかけの立て札を作ってください、黒川町水田周辺の道路に標示し終わったのは、もう日暮れだった。前野先生のお宅から一望の自作田に餌場を作り、管理してやろう

と積極的な申し出を受け、小中学校の皆さんに川魚集めを依頼した。翌日野鳥の会の林さんらの観察によって下くちばしの先端 $\frac{1}{3}$ ほどが欠けているのを発見した。羽毛の白色もうすよごれており元気がないのは、このためで採餌困難を思わせた。給餌を続けながら2～3日様子を見ることにした。

## 2. 初期移動

黒川町を中心に心ないカメラマンに追われながら1kmほどの移動をしていたが、7日には4kmほど離れた坂口小学校の裏に現われた。すぐにも姿を消す様子がないので小中学生がめんどうをみてくれることになった。観察日記をつけたり、餌を与えたりとの保護活動が始まった。ここにとどまる様子だったので、武生市教委では小川にセキを作って給餌を準備をされたが、18日再び白山地区に戻り小中学校から一望の都辺町の水田に住みついた。白山公民館主事の上坂信行さんが、小中学校と連絡をとりながら、給餌観察の保護活動を始めてくださった。給餌場は都辺地区水田東西500m、南北1kmほどのほぼ中央に5箇所作ったが、鳥の活動状況から2箇所に、更には1箇所に決めた。

## 3. 保護と観察

6年ぶりの再現で人々の関心は高い。冬に向かう時期でもあり、多分対岸から疲れて飛来したと考えられ、寒風にさらされている羽毛もみすぼらしげだし、関係者一同給餌対策を樹てた。私が20cm前後のフナを持って行ったのは12月の13日で、坂口公民館裏40m程の所の水田に50cm角で深さ10cmの場所を作り、その中に6匹と横を流れる小川に10匹を入れた。2時間も待った頃小川の岸をつつきながら近よって来た。下くちばしが欠けているため、斜めにつき出してとりにくそうであった。採っているものは草の根か何かであろう。餌場をすぐに見つけてとびこんだ。「さあおあがり」という気持ちで一ぱいだった。前回の鳥は1回で捕食したのにこの鳥は一匹を捕えるために忙しく数百回も試みねばならなかった。この狭い中のフナ6匹を食するのに30分もかかっていた。その時の1枚がこの写真である。福井、鯖江、芦原の有志の方猟友会愛鳥モデル校愛鳥教育研究会野鳥の会からフナやその購入資金が贈られ、都辺地区へ移ってからは、餌も充分となり毎日白山公民館主事の上坂さんが給餌と観察を続けてくださった。給餌は1日2回フナ10匹ぐらいづつで、アオサギやカラスの分も考えられている。観察は行動半径の程度だが、嫌いなレンズの光に追われる以外は餌場の近くで終日を過ごし大きく動くことはないようであった。

地区住民の方も熱心に見守ってくださった。“今日はフナを5匹もたべた”とか、“排便が全く水様だが病気ではないか”とか電話を頂き、文化活動にもとりいれられて

コウノトリの生餌になさむ鰯釣りて

裏の中を子は帰り来ぬ

といった歌も数多く詠まれた。

1月も終わり頃になると鳥も見ちがえるほど元気になり、はばたきも力強く見えた。

#### 4. 捕 獲

2月にはいって文化財担当の県社会教育課へ関係者が集まってこの問題について論議を行なった。

(1)農耕が始まれば行動範囲は大きくなるが採餌は不充分となろう。

(2)農薬に汚染されることは確実だろう。今の鳥は汚染されていないだろうからできるだけ命を伸ばしてやらねばならない。

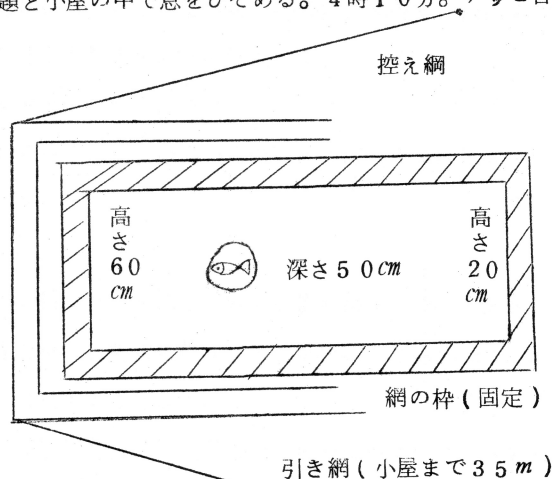
(3)完全な「渡り」の性質はないだろう。

などの点から捕獲し豊岡市の保護センターに送ることに決定した。文化庁の同意と農林大臣の許可を待つことにして、猟友会野鳥の会で捕護することになり場所作り、捕獲具について検討した結果図のような無双網を使用することにした。

25日許可あり、26日未明猟友会南越支部長の佐木さん、林さん私の3人が小屋にはいった。前日までの様子から2時間もすれば捕獲できるものと思ったが、何を感じたのか腹を空かしているのに日が暮れても餌場に寄りつかず翌日を期して引き上げた。

27日も未明に小屋にはいったが餌場から50~100mの所を往復するだけ、刻々と知らせてくれる本部からのトランシーバーに耳を傾けているだけだった。午後3時頃上坂さんに餌運びを頼み周囲にもまいてもらった。鳥は横目で眺めているようであった。3時40分近よってまいた一匹を食べたが網をかけるべき餌場にはいない。中のフナを認めていながら右にまわり、左にまわり警戒している。しかしもう時間の問題と小屋の中で息をひそめる。4時10分。アッと言う間に餌場に入り一番深い所にくりつ

けたフナを捕食。網は引かれ瞬間に成功した。かけつけると、くちばしのつけ根の赤が強く目にしみた。声が出ないので、大きな息で喘いでいたが直ちに網を除き体をすっぽり覆って第5中学に運び各部の測定をし、輸送用の箱に納め観覧者多数の希望をお断わりして日暮れて武生市教育委員会で一泊すべく輸送す



る。

捕獲鳥	嘴 峯	欠損	つばさ	跗 蹠	体 重	尾 長
捕獲鳥	2 2.5 cm	8 cm	6 2 cm	2 4.5 cm	6 kg	2 3 cm
大正時代の 剥製	2 6 cm		6 6 cm	2 6 cm		2 7 cm

コウノトリは雌雄同形同色その判別は繁殖期に大きい方が雄とわかるだけで、先の表は雌雄の点では区別ができない。日本の従来の鳥は栄養や近親結婚の関係で小さくなってきているといわれている。豊岡の鳥のデータは入手していないが、有機水銀汚染で死んだ鳥は4.5～5kgということである。

28日大社号グリーン車で運ばれたコウノトリは無事ゲージに入れられて元気をとり戻している。大がかりな報道陣に囲まれた捕獲であったが、無事保護されたことを喜び、明治の世には方々で営巣したコウノトリをこゝまで追いこんだ人の破壊を反省し、自然愛護の精神をもっともっと多くの人にと願い、保護の手をさしのべられた方々に深く感謝を申し述べたい。

河野小学校 校長